

序説 天台山の詩歌を収録する文献

天台山に関わる詩をもつぱら収録している選集に、宋の李庚や林師葳等が編集に関わった「天台前集」がある。他に、近人の集注である許尚枢の「天台山詩聯選注」がある。卑見によれば、選集はこの二点である。その他、明の釈伝灯撰述の「天台山方外志」、「古今圖書集成」でも詩を集めた部分がある。以下簡単にそれぞれの概要を述べる。

(一) 天台前集」について

「天台前集」は四庫全書に収録されて残っている。そこで先ず「四庫全書総目提要」の該当箇所を掲げて翻訳し、次にこの資料についての解説を施す。

* 「四庫全書総目提要」卷一八七 集部四〇 總集類二(本文は珍本第二集所収)

■ 本文の部

【天台前集三卷前集別編一卷續集三卷續集別編六卷】(浙江范懋柱家天一閣藏本)
案是集皆哀輯天台題咏。《前集》、宋李庚原本、林師葳等增修、皆錄唐以前詩、成於寧宗嘉定元年戊辰、有郡守宣城李兼序。《前集別編》一卷、則師葳子表民所輯補。又附拾遺詩十二首、有陳耆卿跋、及表民自記、題癸未小至、乃嘉定十六年。《續集》前二卷亦李庚原本、後一卷則師葳林登李次暮等所彙錄、皆宋初迄宣政間人之詩、亦成於嘉定元年。後附拾遺詩七首、跋稱得此於會稽鬻書者十年、今刻之《續集》後似亦爲表民所題也。《續集別編》、則表民以所得南渡後諸人之詩、及《續集》內闕載者、次第哀次而成。前五卷未有表民自跋、題戊申中秋、乃理宗淳祐八年。後一卷末題庚戌夏五、則淳祐十年。蓋父子相繼甄輯、歷四十年而後成書也。庚字子長、其爵里無考。惟李兼序有「李槩出其先公御史所哀文集」語、又有「寓公李公語」、則嘗官御史而流寓天台者也。師葳字詠道、臨海人、嘗官州學學諭。表民字逢吉、與林登李次暮仕履均不可考。表民別有《赤城集》、詩文兼載、此集則有詩而無文。雖僅方偶之賦詠、而遺集淪亡者、每籍此以幸存百一、足爲考古者採摭之所資、固當與《會稽掇英總集》諸書並傳不廢矣。此爲明初刊本、而《前集》後題「台州州學教授姚宜中校勘」一行。《前集別編》後題「台州州學教授姜一容點檢」一行。蓋原從宋刻翻雕、故尚仍舊式。惟每集下以元亨利貞四字分編。案「貞」乃宋仁宗嫌名、宋代諸書例皆改避、師葳等不應於標目之中、顯觸廟諱、殆重刻者所妄加歟。

■ 訳注の部

● 訓訳

案ずるに是の集は皆な天台の題咏を哀輯するなり。

《前集》は、宋李庚の原本、林師葳等の増修、皆な唐以前の詩を録す。寧宗の嘉定元年戊辰に成る。郡守宣城の李兼の序有り。

《前集別編》一卷は、則ち師葳の子の表民の輯補する所なり。又た拾遺詩十二首を附す。陳耆卿の跋、及び表民の自記有り。「癸未小至」と題すれば、乃ち嘉定十六年なり。

《續集》前二卷も亦た李庚の原本、後一卷は則ち師葳、林登、李次暮等の彙録する所なり。皆な宋初より宣政間迄の人の詩なり。亦た嘉定元年に成る。後に拾遺詩七首を附す。跋に

「此を會稽の鬻書に得て十年、今《續集》の後に刻す」と稱すれば、亦た表民の題する所たるがごとし。

《續集別編》は、則ち表民得る所の、南渡後の諸人の詩、及び《續集》内に闕載せる者を以て、次第に哀次して成る。前五卷末に表民の自跋有り。「戊申中秋」と題すれば、乃ち理宗の淳祐八年なり。後一卷の末に「庚成夏五」と題すれば、則ち淳祐十年なり。

蓋し父子相繼いで甄輯し、四十年を歴して後に成書するなり。

庚、字は子長、其の爵里に考無し。惟だ李兼の序に「李榮、其の先公の御史の衷する所の文集を出す」の語有り。又た「寓公李公」の語有れば、則ち嘗て御史に官して天台に流寓する者なり。

師葺、字は詠道、臨海の人。嘗て州學學諭に官たり。

表民、字は逢吉、林登・李次譽と仕履するも均しく考すべからず。表民に別に《赤城集》有り。詩文兼載す。此の集は則ち詩有りて文無し。

僅に方偶の賦詠なりと雖も、淪亡を遺集する者にして、每籍此以て、幸いに百に一を存す。古を考うる者の採摭の資する所と爲るに足る。固より《會稽掇英總集》諸書の並びに傳して廢せざるに當る。

此れ明初の刊本たりて、《前集》の後に「台州州學教授姚宜中校勘」の一行を題す。《前集別編》の後に「台州州學教授姜一容點檢」の一行を題す。蓋し原は宋刻に從いて翻雕するなり。故に尚ほ舊式に仍る。惟だ每集の下に「元亨利貞」四字を以て編を分す。案ずるに「貞」は乃ち宋仁宗の嫌名なり。宋代の諸書の例皆な改避す。師葺等應に標目の中において顯かに廟諱に觸れるべからず。殆んど重刻せる者の妄りに加ふる所ならんか。

●語注

○哀輯 よせあつめること。

○李庚 「宋人伝記資料索引」に、字は子長、臨江県（四川省）の人で、臨海県（浙江省）に流寓した。紹興十五年（一一四五）の進士。官監察御史、兵部郎中を歴し、南劍州県の知事となり、袁州県の知事に転任しようとしたが、赴任する前に亡くなった。「詒癡符集」がある、とある。

○林師葺 「宋人伝記資料索引」に、字は詠道、号は竹邨、臨海県の人。博雅にして古を好み、古帖秘文を買い集め、千余巻を積み上げて、校讐校訂に打ち込んで日夜を忘れるほどであった。王厚之や桑世昌らの名流と交わった。年七十五にして卒した。唐以前の天台山を歌った題詠を集めて「天台前集」を編纂した、とある。

○李兼 「宋人伝記資料索引」に、字は孟達、号は雪巖、宣城（安徽省）の人で、李宏の孫。台州県の知事をつとめ、善政を敷き、民に慕われた。開禧四年（一一二〇）に亡くなると、吏民は巷で哭するものが続出し、市場を閉鎖された、とある。

○林表民 「宋人伝記資料索引」に、字は逢吉、号は玉溪、台州臨海県の人。師葺の子。博物洽聞で、「赤城續志」「三志」「赤城集」「玉溪吟草」などの著述がある、とある。

○仕履 熟語は無いが、任官のことだろう。

○陳耆卿 「宋人伝記資料索引」に、一一八〇～一二三六。字は寿老、号は質臆、臨海県の人。嘉定七年（一二二四）の進士。官は国子監司業に至り、端平三年（一二三六）卒。著に「論孟紀蒙」「質臆集」「赤城志」（いわゆる「嘉定」赤城志）がある、とある。

- 小至 冬至の一目前。
- 林登 「宋人伝記資料索引」によれば、字は叔父、小名は克仁、小字は公寿。靖州会同県（湖南省）の人。賦に長じ、宝祐四年（一二五六）に五十一歳で進士に及第した、とある。
- 李次譽 不詳。
- 宣政間 政和宣和ならば、徽宗末の年号。北宋末ということか。
- 哀次 集めて編次する。
- 甄輯 調査して集める。
- 李檠 不詳。
- 寓公李公 この句、現行本の李兼の序になし。
- 方偶 一方の隅。
- 淪亡 沈み滅びる。
- 採摭 拾い取る。
- 合稽掇英總集 二十卷。宋孔延之の編。越川の長官であったときに会稽に関する詩文・金石など八百五篇をあつめたもの。存。四庫全書所収。
- 嫌名 天子や父祖の名と同音、または似通った音の文字。もともと天子や父祖の名と同じ文字は、避諱として、書いたり読んだりするのを避けていたが、やがて諱と紛らわしい音の文字も避けるようになった。仁宗の諱は、禎であり、貞の嫌名である。
- 標目 題名か。

●口語訳

考えるに、この総集は、すべて天台山に関わる詩歌を集めて編集したものである。

「天台前集」は、宋の李庚の原本に、林師葺らが増修を加えたもの。すべて唐以前の詩を収録する。寧宗の嘉定元年（一二〇八）戊辰に完成した。郡守である宣城の李兼の序がある。

「前集別編」一卷は、林師葺の子の林表民が集めて補ったものである。さらに拾遺詩十二首を付加している。陳耆卿の跋と林表民の自記がある。「嘉定癸未小至」と記しているので、嘉定十六年（一二二二）の作であろう。

「續集」の上中の二巻も、李庚の原本に、林師葺らが増修を加えたもので、下巻は林師葺、林登、李次譽らが集めて収録したものである。すべて宋初から徽宗朝まで（北宋）の人の詩である。これも嘉定元年に完成した。最後に拾遺詩七首を付加する。跋に「この書を会稽の書肆にて手に入れてから十年、今「續集」の後ろに刻す」と言っているので、これも林表民が書いたものであろう。

「續集別編」は、林表民が得た、宋室南渡後（南宋）の諸人の詩、及び「續集」で収録漏れしたものを、順序立てて集めて作ったもの。前五巻の末尾に林表民の自跋がある。ここでは「淳祐戊申中秋」とあるので、理宗の淳祐八年（一二四八）の作であろう。最後の一卷の末尾には「庚戌夏五」とあるので、それは淳祐十年（一二五〇）である。

おそらく、林師葺、林表民父子が、継続的に調査して集め、四十年をかけて後に全体が完成したものである。

李庚、字は子長、その爵里については考える手立てが無い。ただ李兼の序に「李檠が、

その父君である御史が集めた文集を出す」という記述がある。また「寓公李公」の言葉もある。そうであれば、李庚は、嘗て御史の官として天台に流寓したことがある者なのであろう（語注参照）。

林師葳、字は詠道、臨海の人。嘗て州学学諭に任官した。

林表民、字は逢吉。林登、李次晷ともにどういう官についたのか、何も分からない。表民には別に「赤城集」という書物がある。そちらは詩と文章の両方掲載している。しかし、この「天台集」では、詩のみで文章は収録していない。

この集は、ほんの片隅の場所について歌ったものだが、滅びてしまったものの中から探し集めてきたものであって、幸運にも百のうち一でも存しているものである。古い時代のことを考究する者が古い資料を拾い集めるのに資するものである。あの「会稽掇英總集」といった書籍たちと同じように、伝存して廃棄されることのなかったものにあたる。

これ明初の刊本で、「前集」の最後に「台州州學教授姚宜中校勘」の一行を書き付けてある。「前集別編」の後ろには「台州州學教授姜一容點檢」の一行が書き付けてある。おそらく、元々は宋刻刊本に倣って復刻したものだろう。なので形式は旧式に従っているのである。ただ各集の下に「元亨利貞」の四字を用いて編を分けている。考えるに「貞」は宋仁宗の諱である「禎」と音が似ている嫌名である。宋代の諸書ではみなこの字を避けて用いない。師葳らは題目などにおいて明らかに廟諱に抵触してはならないはずだ。（本来嫌名である「貞」の字を含む「元亨利貞」は用いられて居らず）重刻した者が勝手に書き加えたものではなかるうか。

■解説

「四庫提要」の記事なども参照しながら「天台前集」について概観しておく。

本書はもとは「天台集」という名で、李庚なる人物が天台山に関わる唐代以前の人の作品を集めていたものであった。これに林師葳らが補修を加えて三卷本とし、南宋の嘉定元年（一二〇八）に世に出した。これと同時に、林師葳の子の林表民が北宋期の詩を集め、「天台統集」として「天台集」の附録とした。更に、嘉定十六年（一二二三）に至り、林表民が唐代の詩を拾遺し「前集別編」とした。更に淳祐八年（一二四八）から同十年（一二五〇）にかけて、やはり林表民が宋朝南渡後の作品と「天台統集」未収録の作品とを集めたのが「統集別編」である。林表民には、他に天台山に関する詩文集である「赤城集」の編集もあった。

このサイトでは、主に唐代以前の作品を扱う予定であることから、「天台前集」「前集別編」収録の詩についてあらましを述べておく。

上巻には、孫綽の賦など六朝期の賦が二篇、李徳裕の賦が一篇。謝靈運と李巨仁など六朝の詩が三篇。唐玄宗以下中唐までの詩が五十一篇。中巻には、中晩唐の詩が八十一篇。下巻には、晩唐や僧侶の詩が五十九篇。別編には、秦時歌謡など隋以前の詩が七篇、唐代の詩が九十三篇。拾遺には葛玄の詩が一篇、唐代の詩が十一篇収録されている。合計すると、賦が三篇で詩が三百六篇。時代で言えば、隋以前のものが十三篇で唐代のものが二百九十六篇となる。

唐代のものでは全唐詩に未収のものもあり（柳泌「贈衡岳隱禪師」、李紳「題龍宮寺淨院四上人」、鄭薰「桐柏觀」等）、また文字の異同の検討の上でも貴重である。

本サイトでは「前集」と略す。

(二)「釈伝灯」天台山方外志」

本書は天台山の地誌で、撰者の釈伝灯は、天台山の高明寺の僧侶。万曆二十九年（一六〇一）の成書。「中国仏志議刊」第三輯所収。全三十巻で、巻二十七～巻三十の「文章考」に、明代までの天台山関係の詩が収録されている。

本サイトでは「方外志」と略す。

(三)「古今圖書集成」

正式名は、欽定古今圖書集成。清初に編まれた中国最大の類書。康熙帝の命により編集が始まり、雍正帝の時に完成（雍正四年「一七二六」の序有り）。

方輿彙編山川典の、第一百二十一巻～巻一百二十五が天台山、巻一百二十六が桐相山を対象とする。このうち、巻一百二十五天台山部芸文三が詩で、明代までの詩を収録している。また巻一百二十六にも桐栢山関係の詩を若干収録する。

本サイトでは「古今」と略す。

(四)「許尚枢」天台山詩聯選注」

西安地圖出版社の「天台山旅遊文化叢書（全五冊）」のひとつ。許尚枢の編著。赤城・桐栢などの地域に分けながら、古代から現代に至る詩を収録し、簡単な註を施したもの。日本人の作品や、聯なども収録している。

本サイトでは「許本」と略す。

以上

訳注加筆修正…薄井俊二 二〇二三年五月三十日

*本稿は、拙稿「天台山の詩歌（其一）」（「埼玉大学紀要（教育学部）」第五八巻第一号、二〇〇九年三月）を元に、加筆修正したものである。